

## 第四学年

四(五) 郷土愛  
主題：彦根の町の発展を

### 彦根城 ござれ桜

今から七十年ほど前、彦根は、まだ「彦根町」といわれていました。そして、日本中が不景気で、なんとなく活気のないころでした。

当時、町議会議員に吉田繁治郎という人がいました。繁治郎は

「彦根の町をもっと発展させたいものだ。彦根城を生かして、日本中の人が来てくれる観光の町に、何とかできないものだろうか。」

と、いつも考えていました。そして思いついたのが、桜の名所として彦根の町づくりをすることです。ちょうど昭和八年(一九三三年)、日本中を喜びいっぱいにしたことがありました。十二月二十三日、皇太子(今の天皇)がご誕生されたのです。久しぶりに彦根の町もにぎわい、多くの人たちがお祭り気分を味わいました。

「そうだ。これは良い機会だ。今年、桜の木を植える。ことは、彦根の町の新たなスタートとして忘れられない年となる。桜満開の彦根城にするんだ!」

さっそく繁治郎は、議会に提案し、町全体で桜の木を植

える計画をおし進めるようにたのんだのです。しかし、繁治郎の考えはなかなか受け入れられませんでした。

「石や木の根が張っている城山に、桜の木が根づくものか。」

「あの広い城山に、いったい何本の桜を植えるつもりだ。莫大なお金と時間がいるじゃないか。」

ほとんどの人たちが、繁治郎の考えに、顔を曇らせました。

「わたし一人でもしなければ……。」

そう考えた繁治郎は彦根の町の家一軒一軒に「桜満開の彦根城」の話をし、お金を寄付してくれるよう、たのみに歩きました。彦根城を桜の花で囲むには、千本ぐらいの苗木が必要だったので。



繁治郎は「ござれ」という食堂を経営していました。仕事の合間を見つけては町の人にたのみに歩きました。仕事が終わってから出かけ、帰りが夜中にな

ることもしょっちゅうでした。それでもなかなかお金は集まりません。食堂をおくさんや店の人にまかせて、たのみに歩くこともしました。

「桜の木を植えるなんて言つて。本当は自分のお金もうけじゃないのか。」

こんなうわさが立つても、繁治郎は負けませんでした。足が棒のようにはいれあがつても、声がかからにかれても、たのみに歩きました。そんな繁治郎のすがたに心打たれる町の人たちがでてきました。そして繁治郎は、とうとう自分のお金ときふ金をあわせて、桜の苗木千本買うことができたのです。

昭和九年二月、繁治郎は、雑草だらけのお城の周りに苗木を植え始めました。くわであなをほり、一本ずつ植えるのです。寒い冬の仕事です。凍えそうな手に息を吹きかけながらの作業です。手伝ってくれる人達は、たった数人だけでした。しかし、木の苗は冬の間に植えてしまわないとうまく根つきません。繁治郎は、ただひたすら桜満開の彦根城を夢見て、一心不乱に植え始めました。

ようやく植え終わると、この日から桜の世話が始まり



ました。毎日毎日、千本の桜の様子を見回ることが、繁治郎の日課になったのです。根づいていない木には、そつと肥料をやりました。葉に虫がつくと、一匹一匹、手で取り除きました。たおれかけた木には、支えをしました。た。

「はやくきれいな花を咲かせておくれ。」

繁治郎は話しかけるようにして、毎日毎日桜の苗木の世話をしたのです。

こうして育つた桜の木に初めて花が咲きました。その花をじつと見つめる繁治郎の目には、涙があふれていました。そして、年をおうごとに、春の彦根城は、桜の花で美しくいろどられるようになりました。繁治郎の願いどおり、彦根城の桜を見に来る人たちも年々増え、彦根の町は観光の町として発展しました。いつしか彦根の人は、繁治郎の店の名「ござれ」をつけて、彦根城の桜を「ござれ桜」と呼ぶようになりました。

昭和三十二年、(一九五七年)吉田繁治郎はなくなりました。しかし、繁治郎の彦根の町の発展を願う心は、今も彦根城のござれ桜が、私たちに語り続けているのです。

